

教員・保育者養成を目的とした音楽教育に関する提言

— 音楽指導の在り方と子ども育成舎「ゆう」の実践 —

Recommendations for Music Education Aimed at Training Nursery and Elementary Teachers

: Existences of Music Instruction and Practice of a Nursery “Yuu”

押 川 貞 生

Sadao OSHIKAWA

キーワード：教育指導者・音楽教育・保育施設・保育士・表現技能

1 はじめに

教育は、一人一人の子どもがそれぞれに自己を懸命に開拓しながら、未来に向かってたくましく生き抜く力を身に付けさせることをめざした限りなく連続的な営みであり、日本の将来をあずかる大切なものである。

したがって、教育にたずさわる者がその職責を遂行するためには、社会人として法律・法令等を遵守することに加え、教職員としての高い識見と専門的知識、豊かな人間性と深い教育愛や強い使命感が求められる。

2 小学校教諭・幼稚園教諭・保育士を志す学生へ

それぞれの資格を取ることを志す学生にとって、3つの心構えがある。

まず、1つめは「教育指導の楽しさ」は、「人間の根っこ」づくりに関わる仕事だということである。人間はその一生をかけて「一人の人間としてどう生きるか」ということを自分に問い続けるものである。根っこがひ弱では、問い続けることは出来ない。

教育指導の仕事は、子ども一人一人の根っこを太く頑丈に育てることである。

子ども一人一人に関わり、その子に応じた根っこをしっかりと育てることが「教育指導の楽しさ」である。

2つめは、教育指導者として子どもの前に立つ以上は、「大人としての判断」「大人としての言動」が必要である。特に思春期の子どもたちは、常に気持ちが揺れている。その揺れる気持ちに寄り添いながらも、子どもたちに的確な判断と適切な言動で接していくことが大切である。それが、子どもを尊重するということである。

3つめとして、「子どもと同じ目線で」指導する。子どもの目線が理解できると指導の方向性ははっきりしてくる。また、指導の方法をたくさん見つけることが出来る。「理解する」ということは、教育を行う際の原点である。「理解する」ためには、子どもをよく観察し、子どもの話をじっくり聞くことである。子どもの前でしゃべりすぎる指導者は、子どもを伸ばすことは出来ない。独りよがりな喋り続ける指導者になってはならない。

3 学生から社会人になるために

社会人としてどんな振る舞いが必要なのか、具体的に5つあげてみたい。

1つめは「挨拶」である。元気よく、笑顔で、自分から「挨拶」をすること、これは人間関係を

良好にする秘訣とも言える。

2つめは「有り難うございます」と「すみませんでした」という2つの言葉である。

3つめは「言葉遣い」である。「私的には…」とか「私はア…そのことについてエ…」というような言葉遣いは大人としてどうだろうか。言葉は正しく使ってこそ相手に伝わるものである。美辞麗句を言う必要はないが、正しい言葉で会話してほしいものである。

特に、教育指導者は子どもにとって「言葉のモデル」であるということ意識することである。

4つめは「服装・髪型」である。中学生の子どもに言うようなことをと思うかも知れないが、なぜ中学生に服装や髪型の指導をするかという社会性を身に付けさせたいからである。TPOに合った服装ができるということは社会性の1つである。黒っぽいスーツを着ておけばOKというものではない。身だしなみで一番大切なのは「清潔感」である。

5つめは「簡単そうな仕事、誰がやってもできる仕事を手抜きしない」ということである。

人は愛情に傷つき、愛情に癒され、愛情に勇気づけられる。一人の人間として真摯に子どもと向き合うとき、子どもは育ち、そして、自分自身も育つのである。

4 音楽教育について

音楽教育の究極の目標は、「豊かな情操を養う」である。情操とは価値あるものを求める感情または態度である。価値とはその人にとっての価値「主観的な意味」と社会的に認められているという性格を持っている。音楽科教育は「豊かな心・豊かな感性」を育てることである。感性とは価値あるものに気付き（感覚）、感じるしなやかな心である。この感性を手がかりにして人間としてよりよく生きようとする自分を自分なりの表現や行動で表していこうとする心が豊かな心である。感性の出発点は感受性である。つまり、しっかり「見る、聴く、味わう、嗅ぐ、触れる」などの感じること、気付くことである。無気力やシラケの根っこには、感受性の未熟さやいびつさがある。

(1) 「豊かな感性」を育てるとは

- 子どもたちの能動性を高める。
- 子どもたちの理性的・論理的な働きや働きかけに、主体性をもたらす。
- 子どもたちの個性（普通いう「個性」）を明らかにする。

(2) 感性開発のために

- 子どもの感覚を大切にする。
- 子どもの感情にうったえる。（「分かった」ではなく、「好きか・嫌いか・嬉しいか・面白いか」の気持ちを聞くようにする）
- 直接体験をさせる。
- 具体物、写真、統計資料などを使う。
- 驚きを大切にする。
- 発散的思考を大切にする。（多用なイメージを描かせる）
- 子どもの考えや答えをゆさぶる。
- つぶやきを聞きのがさない。（教師の感性や直感力が問われる）
- 支持的風土（何をいってもよい集団の雰囲気）
 - ・どんな考えも大事にする。
 - ・相手の身になって考える。
 - ・相手の発言や行いに、どこかよいところはないか探す。
 - ・よいところを見つけほめる。

- ・失敗や間違いを励まし力づける。
- ・感謝，共感を大事にする。
- ・集団の構造が，できるものでできないものにならない。

(3) 音楽教育が果たす役割

- 音楽科教育が，教師の情熱と努力の積み重ねによって，教育の実績を上げ，周囲からも高い評価を勝ち得ている例も少なくない。
- しかし一般には，音楽科教育全体から見て，それほど重要視されず，やや孤立したマイナーな存在であることも事実である。(行事等において，ようやくその存在意義を確認し合う場面がある)
- 音楽は学校教育の社会的機能から見て，周辺的な教科であることも，ある程度やむを得ない。(社会的認知度が低い)
- 音楽が苦手，楽譜が読めない，数学や国語ができなくても音楽で生き生きしていた等の発言が多々あるがこれは軽視されているのである。
- 音楽科は生活を明るく豊かにする為の教科である。
- 音楽を教育の基本として位置づけたプラトンは人格形成の基本づくりに音楽が力を発揮することを深く認識していた。古代ギリシャの哲学者プラトンは，人間の成長期に，ムーシケー(現在の音楽より幅広い意味)と呼ばれるものを体験しなければならないと述べている。
- 中国の儒教の思想にも，人間形成に音楽は必要であることが示されている。

5 音楽表現技能の習得について

音楽を表現するには豊かな表現力を身に付けることが大切である。子どもの指導に当たっては指導者が豊かな指導力を発揮していくことが子どもの表現力を高めることになる。そのために指導者がしておかなければならないことを上げておく。

(1) ピアノ伴奏の習得

ピアノについては譜面を暗譜するほど弾きこなしておくことが必要である。譜面ばかりをみているのでは子どもの行動が把握出来ず適切なアドバイスをしていくことが出来ないのである。指導する楽曲については暗譜しておく必要がある。

(2) 歌唱法の習得

- ①歌唱については，まず発音で母音，子音，正しい口の開け方を習得する必要がある。教師がしっかり身に付けて子どもの指導に当たることが重要である。正しい口の開け方がいかに明瞭な発音で聞き取れるかの体験をして，そのことを子どもに指導していかなければならないのである。
- ②次に呼吸法について学ばなければならない。しっかり腹式呼吸を身に付けなければならない。息の吸い方出し方を学び，そのことが声量と関係が深いことを理解して，自らがそれを習得して子どもたちへの指導に臨まなければならない。息の使い方が音楽表現に関係が深いことを理解しなければならない。

(3) よい指導者は自らやってみせ，最高の指導者は心に灯をつけるのである。

(4) 基礎・基本は，好きでも嫌いでも身に付けなければならないもので，その上に個性が育つのである。

(5) 個性は，基礎・基本の上に開花するもので，「くせ」や「わがまま」は個性ではない。

6 認可外保育施設 ～子ども育成舎「ゆう」の実践から～

(1) 設立の趣旨・目的

- ①労働者が充実した職業生活と家庭生活を営むことの出来る環境づくり
- ②子どもを養育する労働者の雇用の安定を図る
- ③子どもに適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る
- ④子どもの発達を見守り、保護者の就労を支援する

(2) 「ゆう」について

「ゆう」の名称には五つのコンセプトが含まれている

- ①裕 = ゆとりがある施設環境
- ②友 = 友だちをつくる
- ③遊 = 楽しいあそびを通して
- ④勇 = 心が強く物事に恐れない勇氣
- ⑤優 = 優しさ、しとやかさを持つ

(3) 子ども育成舎「ゆう」の経営

①経営理念

保護者・地域社会に信頼され、子どもが将来生きていくための基礎的・基本的な学習力、生活力を身に付けさせるために、大らかな心で頑張れる所員が豊かな指導力を発揮し、魅力ある育成舎づくりを推進する

②経営目標

クリエイティブ・ザ・アトラクティブ・ルーム「魅力ある育成舎づくり」

③クラス目標

～伸びる・高める・広がる～

(4) 育成舎のビジョン

①ビジョンⅠ

めざす育成舎像→舎力の強化

- 子どもが生き生きとした活気あふれる居場所
- 学び合いを育む居場所
- 学び方を身に付ける居場所

②ビジョンⅡ

めざす子ども像→人間力の育成

- 主体的に学び、互いの良さから学び、互いに高めあう子ども

③ビジョンⅢ

めざす所員像→所員力の強化

- 育成舎所員としての自覚と使命感を持ち、法令・法則、運営規程に基づいて職務を遂行し人間的魅力を備えた所員

(5) 「頭」と「心」と「体」は友だち ～「ゆう」で三つの基盤づくり～

①知（確かな学力の基盤づくりとして）

育成舎「ゆう」では、子どもに確かな学力をつけるために以下の実践を行う

- 「しっかり考えて・じっくり判断して・はっきり表現する」というプロセスを大切にする
- 家庭学習の習慣化のため、教育の基盤である家庭との連携を強化する

②徳（豊かな心の基盤づくりとして）

- 本の読み聞かせてで情操を
- 礼儀作法で品性を
- 体験活動で自主性を育みます

③体（健やかな体の基盤づくりとして）

- 食育を充実する
- 遊びを通して、運動を奨励する
- 体育的遊びを取り入れる

(6) 組織的で責任ある職場体制

- ①説明責任を果たす施設保育 = これからの施設保育では必須条件として当たり前
- ②所員研修は講師を招聘する
- ③ホームページを充実して情報発信をする
- ④情報開示に備えて諸活動の記録を取る
- ⑤組織的に職務を遂行する = 実践に客観性が裏打ちされる
- ⑥発信する文書等は所長の決裁を受ける
- ⑦報告・連絡・相談を徹底する
- ⑧家庭との連携を中心に、地域に根ざした保育の展開
- ⑨公開保育を行う
- ⑩明るい対応 = 来訪者への明るい挨拶や電話での丁寧な受け応え

(7) 子ども育成舎「ゆう」における危機管理

- ①子ども及び職員の生命や心身の安全を確保すること
- ②子ども及び保護者と職員との信頼関係を保つこと
- ③子どもや職員の心理的動揺を防ぎ施設を安定した状態にすること
- ④危機管理のキーワード = 前兆の発見・素早い対応・負の情報
- ⑤保育室内の子どもの様子、施設・設備等の状況を常に点検・把握して小さな変化（前兆）を発見する
- ⑥情報の共通理解を図り、新聞等から得た情報から社会の状況を的確に捉える
- ⑦事件事故やミス、苦情やクレーム等の「負の情報」がいち早く管理職まで伝わる体制を整備し、的確で、かつ素早い、組織的な対応をする

(8) 子ども育成舎「ゆう」の所員として心がけること

- ①子どもに模倣されてもよい言動を心がける。
(特に保育室での言動は気をつける。)
- ②子どもへの話し方を磨く。
(癖のない明瞭な話し方をする)
- ③子どもへの言葉・表情に心を配る。
(きちんとした言葉や、温かみをもった表情は子どもが信頼する。)
- ④豊かな感性で子どもを観察し保育をする。
(感性を磨くためには本を読んだり、講演を聴いたり等して自分を高めることをしていく。)
- ⑤「めあて」と「評価」を意識して保育活動を展開する。
(感とこっぴだけ頼るのではなく、きちんとした説明責任が果たせるようにする。)
- ⑥「自分の保育実践」をつくることを心がける。

(自己の課題を意識して、誰に見られても自信が持てる保育をする。)

⑦視野は広く持ち、実践は焦点化して行う。

⑧分別・常識のある言動・行動を心がける

(特に、時間励行・礼節を心がける。)

⑨保育・諸会議、打ち合わせの時間厳守。

(設定した時間に開始する。遅れないような動きをする。)

⑩報告・連絡・相談を徹底する。

(施設長、主任等への報・連・相を忘れない。)

⑪身だしなみ(服装)に注意する。

(地域、保護者の目を意識する。まず姿形をきちんとすることが大切である。姿形よりも心ではなくて、姿形が心のあらわれであることを自覚する。)

⑫保育室の整理整頓を怠らない。

(毎朝、机等を拭くぐらいのことは心がける。)

⑬勤務時間内に無断で所外に出ない。

(施設長、主事に連絡する。)

⑭提出書類等の締め切り厳守。

(忙しいから間に合わないではなく、締め切りに間に合うような動きをする。)

⑮保育室の美化、環境整備に努める。

(ゴミが落ちていたり、机・椅子がきちんとしていないとき、そのまま放置して勤務を始めない。整理整頓、所内美化に敏感になる。)

⑯保育担当は帰宅する前に必ず保育室を点検する。

(自分の担当保育室を一日の最後に点検するのは当たり前のことである。)

⑰当たり前のことが当たり前ででき、さらに当たり前以上にできるよう心がける。

(9) 保育士と音楽の関わり

①子どもが一日施設で過ごす時に音楽は欠かせない。季節や生活に密着した歌を歌うのである。

〈朝〉 きょうも元気

〈昼〉 おべんとうの歌

〈夕〉 おやつの歌 おかえりの歌

〈季節・行事〉

1 はじまるよ誕生会 2 拍手をプレゼント 3 お正月の歌 4 節分の歌

5 ひなまつりの歌 6 子どもの日の歌 7 七夕会の歌 8 運動会の歌

9 クリスマスの歌 10 お楽しみ会の歌

②指導する保育士はきちんとピアノを弾いて子どもを歌わせなければならない。

③リズム遊びをするときは、保育士のピアノに合わせて色々な動作を取り入れて動き回るのである。

④『子どもの歌 200』という保育実用書の曲を全曲弾けるようにしなくては子どもに染み入る指導は出来ない。

⑤ピアノを弾きながら子どもの様子を見て適切なアドバイスをしていくことが大切である。

⑥その為に、ピアノを弾きこなすには練習しかない、学生の時にどれだけピアノを引き込んだかが保育士にとって大切なのである。

⑦小学校教員よりも保育士はピアノを弾きこなさなければならない。

⑧出身大学によってピアノの弾き歌いの指導に力を入れているところとそうでないところの差が生じている。

⑨保育士はピアノを弾きこなし、豊かな声量で歌って聞かす事が重要である。

(10) 子ども育成舎「ゆう」からのメッセージ

①家庭は人間の基本となる生きる力を付ける場である

②子どもは親の生活をコピーしている＝ダメな者はダメというしつけが大事である

③家庭で生きる力がどれくらい身に付いたかを試す場所が学校である＝学校はルールやマナー、モラルを確かめていく場である

④家庭という小さな社会で練習して、地域という大きな社会に入っていく子どもに責任を持った子育てをする＝家庭・学校・地域がルールやマナーを繰り返し教えることが大切である

7 おわりに

将来良き教育指導者となるために、大学生として

(1) 専門的知識はしっかり身に付ける

(2) 人とのコミュニケーションを大切にする（他者を思いやる心）

(3) いろいろな体験を通して、豊かな感性を磨く

(4) 世の中の常識を身に付ける（社会生活を営んでいくために、将来、常識ある社会人としての資質を培う）

(5) 良き人生の名ドライバーになり長所にアクセル、短所にブレーキという巧みな使い分けをする

(6) バランス感覚の取れた人間になる

(7) 良き個性をのばしていく

以上7点を教育指導者となる大学生に対して提言したい。